

**コラム 『インドネシア・アンボン島の天然ダム決壊に備えた住民の能力強化』が第7回世界水フォーラム「Water Showcase」において「Outstanding Award(優秀賞)」を受賞**

世界水フォーラム(WWF)は、3年に一度世界の水関係者が一堂に会し、地球上の水問題解決に向けた議論や展示を行う世界最大級の国際会議です。WWFは任意会議ですが、多様な主体が参加する規模の大きな会議として世界的に注目されており、この会議で政府・組織が新しいコミットを発表、関係者の自発的約束・活動を促すことで、近年の多くの地球規模の行動に貢献しています。特に「閣僚宣言」「閣僚への提言」では災害や気候変動対応について重ねて強調されました。

WWF7(第7回世界水フォーラム)は、平成27年4月12日から韓国において開催され政府関係者を含む168ヶ国約41,000人が参加しました。ICHARMからも9名が参加し、15のセッション・イベントで運営や発表を担当し、水の防災に関するテーマのとりまとめを準備段階から主導するなど重要な役割を果たしました。

Water Showcaseでは、平成25年7月25日に発生したインドネシア・アンボン島の天然ダム決壊に備えた住民の能力強化(提案者: JICA現地スタッフ、被災地住民、NGOの共同提案)が応募されました。同天然ダムは平成24年の7月に発生し、当時、下流には5,000人近い住民がおり、決壊した場合には大量の土砂と水が一気に流れ下って甚大な被害をもたらす危険性があると懸念されていました。そこで、土木研究所はインドネシア共和国公共事業省、同国水資源研究所と、アンボン島に形成された天然ダムについてのモニタリングに関する共同研究協定を結びました。そして、土木研究所が開発した土研式投下型水位観測ブイを天然ダムに設置しました。ブイを設置したことにより、天然ダムの水位をリアルタイムでモニタリングすることが可能となり、観測データはインドネシア国にも伝送されました。また、前もって決壊の怖さをCG再現動画やパンフレットを用い地元住民に対し普及啓蒙活動を行い、危険な状態になったときには避難を呼びかけました。結果、同天然ダムは平成25年7月25日に決壊しましたが、下流にある村の警戒避難体制を構築できていたため、被害を最小限(避難者5,233名、行方不明者3名)に抑えることができました。

世界から集まった115件の候補のうち、この案件を含む9件が最終選考に残り、選考の結果、Outstanding Award(優秀賞)を獲得しトロフィーが授与されました。ICHARMの澤野上席研究員と徳永上席研究員が当時JICAの専門家としてプロジェクトを主導していたこと、土木研究所の専門家のアドバイスがプロジェクト成功の鍵であったことから、トロフィーはICHARMに寄贈されました。



授与されたトロフィーと  
小池センター長(左)と徳永上席研究員(右)

